

- 1、今日は「イエスの埋葬」から学ぶ。パツハのマタイ受難曲の終わりの部分は「イエスの死」「降架と埋葬」「哀悼」と続く。何とも哀感と静謐が漂う厳粛な思いで会場をあとにした経験がある。アリマタヤのヨセフがその役を担う。福音書ではこの箇所にしか出ない人物である。「身分の高い議員」(マルコ) だという。生前のイエスの場面には現れていない。密かにイエスを想っていた人のようだ。
- 2、「埋葬」の記事を見ると、イエスの死を「遠くに立って・・見ていた」ガリラヤから従ってきた婦人達が手伝った様子はない。ヨセフに声をかけるような知り合いでもなく、また身分の違いもあったのであろう。こんな大事な場面で、イエスを囲む人々が、互いに知り合いでないということも、読者に目を開かせる。イエスとのいろいろな関わりがあり、いろいろな出番があつてよいことを教えらる。
- 3、四つの福音書の「埋葬」の場面を比べてみると、ヨセフを、イエスのシンパサイザー(共鳴者)として好意的に見るか(マルコ、ルカ)、弟子なのに隠していた(卑怯者)と見るか(マタイ、ヨハネ)福音書の意見が分かれている。いずれにせよ「埋葬」は彼でなければできない行動であつた。イエスは、ユダヤの宗教権力者(サンヘドリン[議会]、祭司、律法学者)、およびローマ帝国当局(総督ピラト)による十字架刑の結末を招いた。「十字架刑は、極めて不名誉な処刑方法とされ、また、何時間も断末魔の苦しみが続くので、最も残忍な処刑方法・・・イエス誕生時にはすでにエルサレムの丘陵で2千名以上のユダヤ人暴徒が十字架にかけられたといわれている」(『イエスの実像を求めて』ハイリゲンタール)。政治犯への共感、身の危険を招いたに違いない。ルカはヨセフを「議員、善良な正しい人、同僚の決議や行動には同意しなかった、神の国を待ち望んでいた人、」と最大限の好意を持って記している。このことは、イエスの処刑が、如何に政治的であり、正義にもとるものであつたかを暗示し、ヨセフの埋葬の申し出がやむに止まらない行為であつたと想像される。またそれが可能であつたのは、処刑という最悪な事態であるとはいえ、ピラトがヨセフに「埋葬」を許可する雰囲気もあつたのであろう。そこにはヨセフへの人格的信頼が厚かつたと察せられる。しかしなお「勇気を出して」(mk15:43)と言える行動であつた。
- 4、「埋葬」の場面は、ヨセフの独特な、彼1人の場面である。イエスの生涯にこのような出番を持つ人が登場することは慰めである。ある意味で彼は挫折者である。しかし、なお彼ならではの出番を与えられている。私たちは、多かれすくなかれ、イエスに従うことで挫折者でしかありえない。あの、「神の」ラディカル(激しさ)を生ききれない。が同時に「勇気をもって」私のイエスへの関わりへと招かれている。
- 5、北村慈郎著『自立と共生の場としての教会』(新教出版社)を読んだ(『本のひろば』に岩井の書評あり)。彼は神学校を卒業して赴任した下町の教会で、「バタ屋さん」の壮絶な死にであらう。貧しくされた人々に敷居の高い住宅街の教会で、イエスが皆と食を共にすることの象徴としての聖餐式を行い「教団教師退任勧告」を受けた。彼も現代の教会で、「アリマタヤのヨセフ」の役回りでイエスに関わる人だと思つた。